

熊谷

熊谷は辻堂から 120km、電車で約 2 時間の距離である。ここは、曾祖父と曾祖母が明治 30 年頃より約 10 年間暮らした町である。曾祖父は伊那富県で庄屋を務めていたが、大里郡熊谷町泉町(現在の星川通り付近)へ移り住み、代書業を営んだ。2 人が住んでいた付近は町の中心街で賑やかな場所であった。店の前は星川が流れ、反対側は老舗割烹の魚勝で、隣は人力車屋さんであった。寒い伊那から気温の高い熊谷に移った当初は、慣れるのに大変だったと思われる。

明治時代の熊谷市は、中山道の宿場町という江戸時代からの歴史を引き継ぎつつ、熊谷県(明治 6~9 年)の県庁所在地や製糸の町として、北関東の中核都市へと近代化の最前線を走っていた。荒川土手付近には広大な桑畑があり「蚕糸大国」と云われていた。熊谷から JR で繋がる群馬県安中の碓氷社(富岡製糸場に近接)と信州伊那は、明治期から昭和初期にかけて、巨大な組合製糸のネットワークを通じて、深く結びついていた。また、伊那地方(主に上伊那)と熊谷は、繭の供給と製糸加工という役割分担で、密接な結びつきがあった。明治 40 年には、熊谷に片倉石原製糸所が開業している。曾祖父は、谷中村(現在の渡良瀬遊水地)関連の事案にも携わっていたので、熊谷から谷中村へ頻繁に行き来していたと思われる。熊谷付近の利根川の葛和田^{くずわだ}の船着場から、蒸気船が運航されていたので、船を利用して館林や古河方面に出かけていったのだろう。また、高崎線の上野-高崎間は、明治 17 年(1884)に開通していたので、列車を利用して東京方面に出ることが可能だった。(川端紅葉著 2026・5・2)



「旧宅付近」 ©2026.5 川端紅葉 「星川」 ©2026.5 川端紅葉